

◇◇ 地方の元気を測る新たな指標づくりのすすめ ◇◇

2017年のプロ野球は、圧倒的な戦力（選手だけでなく、フロント、スカウト陣を含む）を誇る福岡ソフトバンクホークスの日本一で幕を閉じた。ところで、プロ野球に関する記事を見ると、最近、“QS”や“K/BB”といった指標を目にするのが多くなった。いずれも投手のパフォーマンスに関する指標であり、QSはクオリティースタートの略で、先発投手が6イニング以上を投げ、かつ自責点を3点以内に抑えた登板数の比率、一方、K/BBは奪三振数を与四球数で割ったものである。これらは、勝利数、防御率、勝率、奪三振数といった従来の指標だけでは十分に評価できなかった“投手の安定性”を測る指標として活用されている。

野球の世界では、QSやK/BBの他にも新たな指標が数多く出現しているが、その背景には、ビッグデータのハンドリングが容易になったことや、球団経営に科学的なデータ分析が必要であるとの考え方が浸透してきたことがあげられる。その先駆的な事例を、2000年代初頭のオークランド・アスレックス（米国のMLBのチームの一つ）に見ることができる。決して裕福とはいえなかった当時のアスレックスは、高い人気や目立った実績ではなく、チーム戦略に合致したパフォーマンスを残している選手を比較的廉価な年俵で集め、優先的に起用することで好成績を残した（そのユニークな戦術は映画「マネーボール」を参照されたい）。またデータという観点では、当時同球団のGM（同映画の主人公のモデル）として采配をふっていたのが、野球経験を持たないデータアナリストであったことも注目に値する。

ビッグデータやデータアナリストが注目されているのは、何も野球やスポーツの領域に限ったものではない。地方創生においても、産業構造や人口動態、人・モノの流れなどのビッグデータを集約化し、見える化した「RESAS」が提供され、まちづくりや地域産業振興に活用されている。また総務省では、2018年度に「統計データ利活用センター（仮称）」を設置し、統計マイクロデータを提供する業務を開始するとともに、データアナリスト等の育成に取り組む方針である。

こうした統計データやマイクロデータを組み合わせることによって、地方創生の分野においても、QSやK/BBのような新指標をつくることはできないのではないか。例えば“ジモティ率（現在の人口に占める、当該市町村に住み続けている人の割合）”や“Uターン率（中学校までは当該市町村に住んでいて、その後、域外に出たものの、現在は当該市町村に戻ってきた者の、現在の人口に占める割合）”などが想定され（いずれも仮称）、それを地域別、世代別に比較することができれば“地元愛”を測ることも可能である。

上記の指標はまだアイデアの域を出ないが、地方の元気を促進するような指標は、他にもたくさんあるはずだ。昨今、データサイエンスをカリキュラムに取り入れる大学が増えているが、新たな指標づくりに向けて、そうした学生を対象にしたアイデアソンを提案したい。

平成 29 年 11 月

コンサルティング事業開発部
上級専門スタッフ

松林 一裕